

鶴彬通信

はばたき

第4号

2011年5月30日

もくじ

- ④～⑦面 東日本震災と三菱釜山ダム決壊事故
- ⑧～⑩面 子ども川柳年間賞、鶴彬川柳の感想文
- ⑪～⑭面 連載「獄中の鶴彬」第二回
- ⑮～⑰面 連載「新興川柳の軌跡」(五、六)

新著「だから、鶴彬」紹介

「鶴彬は世界文学である」

鶴彬を書いた新しい著書が出版された。棚沢健著「だから、鶴彬——抵抗する17文字」。斬新な装丁、アートなレイアウトにまず目を奪われる。二つの章に分かれ、第一章は鶴彬の三十三句を取り上げ、一つの句について二ページずつの意味、背景、類似句などを三～四つの文章で解説、分析していく。第二章は鶴彬誕生の一九〇九年から獄死する一九三八年までを一年ごとに刻んで、その年の時代背景と、それに合わせた鶴の句を取り上げている。同時に「世界の出来事」「日本の出来事」が年表式に添えられ「時代」の特徴がつかめるように工夫されている。

鶴彬作品の普遍性

さて、著者はどんな視点で鶴彬を捉えているのか。「はしがき」で川柳は「一人から人へ口伝えで手渡されていく口承芸術的な側面が強い」「批判、笑い、皮肉、穿ちは、かけあいや対話の中でこそ生き生きと輝く」とし



出版された「だから、鶴彬」

ている。しかしながら近代文学史の研究書に「川柳」も「鶴彬」も登場しない川柳無視に著者は憤慨し、「詩や俳句や短歌にくらべて不易性がない、なかでも時事川柳はその最たるものと低く見られる傾向にある」が、「普遍性、不易性ばかりが文学にとって大切なこととはかぎらない、その時代、その場の限定性の中で最大限に意味を持ち、力を発揮し、やがて読み捨てられ、消えていく文学も必要だし大切なのだ」。しかしながら「不易性のない時事川柳でしかないものが、時間とともに作者の意図を裏切るように不易性、普遍性を獲得していくこともあり得る」として、次の鶴彬の句を取り上げる。

「タマ除けを産めよ殖やせよ勲章をやら

う」の句が「産めよ殖やせよ国のため」という戦時スローガンと勲章制度を見事に突いていると絶賛。喧伝されるスローガンを書き換え、乗っ取って目の前の世界を作り変える落書き芸術、街頭芸術が川柳であるとし、壁新聞やビラ川柳、落書き川柳を貼り付けながら街中をゲリラのように徘徊して廻った鶴彬の行動、川柳を、著者は、ロシア未来派や、ダダイズム、シュルレアリズムの街頭芸術運動と関連づけて「鶴彬は世界文学である」と喝破する。

川柳愛好家に大きな自信を与えてくれる一文であり、鶴彬が世界的な文学、芸術運動との(直接的ではないにしても)つながりを持つとの指摘に新鮮な驚きを感じる。さすが文芸評論家の視線といえようか。

「歴史をつかみ直したい」

世界的広がりを持つ鶴彬川柳について著者は「幸か不幸か、時事的であるがゆえに不易性を獲得しているものばかりだ」「鶴彬は古くから「歴史をつかみ直したい」とし、「鶴彬の川柳とともに、歴史をつかみ直したい。あの過去を、あの歴史を、あの戦争を、あの暗黒を、あの狂気を、あの革命を、あの愚かさを、あの忌

まわしさを、そして八〇年前とたいして変わっていない『いまここ』を：つかみ直したい。『産めよ殖やせよ』の忌まわしい連鎖を断ち切りたい」と熱く語っている。

「鶴彬はいまも生き続けている」という私たちが共通する思いを抱く文芸評論家、新しい、強力な鶴彬研究家が思いもかけず出現したことは、「鶴彬の地元」として大きな喜びである。

尖ったものが好きだった

さて、本編について少しアトランダムに触れてみたい。第一章は鶴彬の三十三句をほぼ初出順に見出しとして紹介、その句の類似句とともに解説している。例えば「三角の尖がりが持つ力なり」の句。今までその意味するところがよくつかめなかったが、「さんらんの陽を破つたる塔の尖端」「剃刀の刃の冷たさの上に踊れ」「三角定規の真ん中に住める」の句を並べ、「川柳は尖った鋭利な刃物」として、鶴彬は鋭角なもの、尖ったものが大好きで攻撃的だった、と著者は説く。そして鋭利なまなざしで穴をあけるのが川柳の穿ちであり「真四角の角をとれば又角が出来」のように「円くなれない鶴彬」とくくられる。なるほどと納得。

「ふるさととは病と一しよに帰るとこ」は室生犀星の「ふるさととは遠きにありて思ふもの」のパロディとして抒情詩人と対照してみせる。新しい解釈だ。

川柳や俳句のような短詩型文学は、作者の意図と全く違った解釈で理解され採用される

ことが、句会等で間々あると聞く。作者が既に没していて確かめようがない場合、違う解釈もやむを得ないこと、どれが正解かわからないこととして「保留」「宙ぶり」状態にしておくのも一つの方法だろう。

シュルレアリスムの作品

そのような例を一つ。「暁をいだいて闇にゐる蕾」。戦雲、凶作、労働争議、言論思想弾圧と続く暗闇の世相の中で、かすかに希望を持ち花開く夜明けを待っけなげな蕾を忘れてはならない——と理解してきたのだが、この著者によれば「暁は巨大な闇に包み込まれ：まだ辺りは真つ暗闇なのだ。：夜明けを迎え、どんどん広がる空の明るさが、一転して、小さな蕾に吸収されていく。：光も夜明けも、じつは蕾の中に閉じ込められて見えない。しかし、にもかかわらず闇と拮抗する暁の鮮やかさ、力強さ、神々しさが読者の脳裏に深く刻みつけられる。：シュルレアリ



「だから、鶴彬」を紹介する
5月20日付の北陸中日新聞

スム的な騙し絵のような作品といつてよい」という。騙し絵のように難しい文章である。しばらく「宙ぶり」にしておくしかない。

第二章では、鶴彬のゼロ歳から二十九歳まで一年ごとに時代を解説、その時代を詠んだ句が配されている。ゼロ歳から十四歳までは、後年作られた句や評論が当ててある。作品とマッチした社会背景によつて、作品への理解が前進する。例えば鶴作品に多い「女工」もの。一九二二年には石川県が結核死亡率全国一だったという指摘でなるほどと納得する。

メキシコ壁画運動と通底

また「白壁に子供のかいた絵がある」の句。漫然と読み過ぎしやすいが、メキシコで始まったシケイロスらの文化運動、壁画運動と通底する作品である。「壁は持てるもの」と持たざるものを分かつ分断の象徴である。壁のあるところに貧富の格差あり、階級の対立あり：漆喰の『白壁』は富者の印だ。：何も知らない子ども悪戯書きほど、破壊的な力を秘めたものはない」との著者の弁は説得力がある。鶴作品の奥行きを感じさせてくれる。なるほどと思わせてくれる解説は多いが、最後に重箱の底をつくような疑問を少々。

「墨を磨る如き世紀の闇を見よ」の句を見出しとして掲げているが、「磨る」はどう見ても「ぬる」とは読めない。「塗る」でなければならぬはずだが、実は、たいまつ社刊（一叩人編）、増補改訂版（澤地久枝）いづれの全集でも「磨る」である。明らかな誤

字、誤植を引用する場合「原文のまま」という意味で「ママ」というルビを振るのが常識だが、どの著書にもないのはなぜか。

復活を秘めた獄中の作句

「復活のつもりで入れる火消壺」。大阪衛戍監獄に鶴彬が収監されていたときの作とされるが、著者の「炭のおき火は簡単には消えない。また復活する。次回も使える。そのため火消し壺。ただでは消えない『炎』。ゆっくり、静かに、ひそかに燃えている。川柳は『火の粉』である」という解説は火消し壺を知らない者の説明であろう。火消し壺は空気の流入を断つので、火はまもなく消えてしまう。簡単に消えずに火が復活するのは欠陥壺である。消えた火——消し炭は再び起こして炭火として使えるから、復活を期して、再び燃えることを胸に秘めて火消し壺の中で一時消えてしまっていたのである。事実、鶴彬は在監中は模範囚だったとの指摘もある。

最後に今後の課題を二つ。鶴彬が高松に川柳研究会を結成したところに、瓦工場や織物工場の労働組合や争議を支援するための落書き川柳、ビラ川柳、カベ川柳、バクロ川柳が全く残っていないことを著者は残念がる。それらの探索こそ私たちの課題である。また、鶴彬が「とどめを刺された」赤痢罹患について、日本軍の元七三一部隊にいた伝染病棟医師・湯浅謙氏の証言——（鶴彬への）赤痢菌多量接種疑惑——の真実解明と、戦犯—投獄後、戦争責任を証言する講演活動を続け、二〇一〇年十一月二日に亡くなった湯浅氏

（享年九四）の足跡探求が私たちに課されている。

さまざまな示唆を与えてくれる著作「だから、鶴彬」である。

《付記》同書は五月二十日付け北陸中日新聞文化欄でも紹介されている。

（鶴彬を顕彰する会 角島 広治）

「湖沢 健（くるみさわ・けん）氏の

プロフィール」

一九六六年東京生まれ。文芸評論家。早稲

田大学ほか非常勤講師。早稲田大学第一文学部卒業。同大学院文学研究科博士課程単位取得退学。プロレタリア文学を研究の中心テーマ、座標軸のひとつに据え、ユニークな文芸評論を展開。「だからプロレタリア文学」（勉強出版刊 二〇一〇年）など

「だから、鶴彬——抵抗する17文字」

発行 二〇一一年四月二十日

発行所 春陽堂書店

定価 千四百円（本体）



光照寺
岩手県
JR上盛岡駅
徒歩6分

鶴彬

川柳作家



撮影／佐々木敏男

本

名、喜多一二の鶴の墓が生地の石川県ではなく盛岡にあると聞いたのは、いつのことだったろうか。この写真を撮ってくれた盛岡在住の佐々木と共に墓参をしてからでも五年にはなる。「手と足をもいだ丸太にしてかへし」のような激しい反戦川柳をつくって鶴は逮捕され、一九三八（昭和一三）年九月一四日に獄死した。赤痢菌を注射されたという噂もある。そんな鶴を故郷で埋葬することは困難だったのだろう。盛岡に住んでいた兄が引き取って弔った。鶴は三〇歳にもならず殺されたが、軍隊の中でも『無産者新聞』を配ったりして抵抗している。私家版で『鶴彬全集』を出した澤地久枝は二〇〇九年三月二十九日に石川県かほく市で鶴の生誕一〇〇年記念祭が開かれ、高松にある生家の喜多本家と浄専寺に建てられた句碑の除幕式も行なわれたと『世代を超えて語り継ぎたい戦争文学』に記している。神山征二郎監督による映画『鶴彬 かくろの軌跡』も評判となった。

少数意見を無視した報い

ダム決壊の惨事と鶴彬…

そして大震災―原発事故

昭和二十年八月十五日と並んで、日本歴史のターニングポイントになるうといわれる今年の3・11東日本大震災。あらゆるメディアで連日報道されているが、とりわけフクシマ原発事故は全世界から注視されている。巨大津波と原発事故の膨大な情報に接して、よく似た状況が数十年前に起きていたことに気づいた。しかもそれは、つい最近知ったことであつた。

記憶を手繰って、はばたき3号の岡田一杜氏卓話にたどりつく。それは二月二十日に開かれた「和」川柳例会に、鶴彬を顕彰する会のメンバーも出席しての岡田氏の話を聞く会であつた。そこで初めて鶴彬の「鉍毒の泥海」と題する連句が、昭和十一年に起きた秋田県・尾去沢ダム決壊事故を詠んだものであると教えられたのである。鶴彬が怒りを込めて十四句も集中して作った大事故とは…と、当時の新聞を探して若干のコメントをはばたき3号の岡田氏卓話に付け加えたのだつた。それから二十日後、大震災が発生した。人も家々も、車も鉄筋ビルも、あらゆるものを



ダム決壊の惨状を伝える秋田魁新聞（右）と読売新聞

押し流し砕いていった津波。さらに原発の爆発、放射能汚染。津波は自然災害としても、原発は明らかに人災。被害の実態や問題点が報道されるにつれ、七十五年前のダム決壊事故に連想がはしり、鶴彬をして悲しみの連句を作らせた事故の実態を、さらに詳しく調べた。横浜市にある新聞博物館で当時の新聞各紙をめくった。いま手元にある大震災とダム決壊の二つの写真グラフを見ると状況は驚くほど似ている。

尾去沢はどんな惨状だったのか。

「尾去沢鉍山の惨事 鉍滓溜池突如決壊し 惨・数百戸押し流さる 死者一千名を突破せむ？」

鹿角郡尾去沢鉍山の鉍滓を溜めて置く中沢溜池の大堤防（高さ五百尺）は最近の豪雨で危険を伝えられていたが、二十日午前四時二十五分頃、一大地響きとともに決壊し、あれよあれよと言う間もなく近代建築の粋を誇る共和館をはじめ中沢、春木沢、笹小屋、瓜島、新堀、新山、西道口、下平各部落の商店、職工役員住家数百戸を押し流した。同溜池は鉍毒を含有せる泥水を以って充滿され、これが一度に奔流せるため押し流された人々は泥土の中に埋められ生死不明であるが、死者一千名を突破するものとみられている。

（秋田魁新報 昭和十一年十一月二十一日夕刊）

「鬼気迫る尾去沢鉍山 三百三十戸を流し死傷約七百名に達す 惨！濁流暴威の跡」

惨事突発の尾去沢鉍山町一帯は早くも冬の訪れた寒空の下に、泥土交じりの濁流に倒れた家、救いを求むる人々を見ながらも現場に

（新聞記事の引用では句読点を適宜つけ、漢字は新字体に、仮名遣いは新仮名遣いに改めた。「>」「<」などの繰り返しの記号は仮名に替えた。「」内の太字は新聞の見出し、…は一部省略部分）

足を入れられず、救護の人々も裏山伝いに道なき途を現場に迂回している情勢であり：一里余に及ぶ濁流暴威の跡は鬼気迫る有様である。：硫化銅の奔流による埋没家屋及び死者等の被害は：合計八七棟三三〇戸で死傷者は約七百名位の見込み。主なる建物は共同浴場、駐在所、劇場協和館で損害額約百万円を突破する見込みである。

「千名生死不明」

尾去沢の惨事原因は数日來の降雨のため堤防の地盤がゆるみ決壊したものと見られる。埋没戸数は三百戸以上、死体発見は五十四名、家屋と共に埋没せるもの三百名以上の見

東日本大地震お見舞い

鶴彬を顕彰する会会長 長谷 久人

鶴彬トライアングルの一角・東北の聖地
他が3・11未曾有の震災に見舞われ、私共の会員5家族6名の皆さんの安否が心配されましたが、幸い難を逃れたとの報にホッとしております。毎日報道されるテレビの画面で、今後、復興のための不安がつつのる一方でございます。一日も早い復興を願ひ、犠牲となつた方々のご冥福と併せ、被災された皆さんのお見舞いを紙上を借りて申し上げます。

込み。米代川に死体続々浮かび上がり消防組出動、死体引き揚げに努力中。埋没した家屋三百戸の家族で判明せる生存者は七十五名で千名以上は生死不明。：なお濁流が付近の田畑数十町歩に渡り流失惨状を呈している。
(東京朝日新聞 同二十一日夕刊)

「尾去沢鉦山 “毒水地獄” の大惨事 鉦毒ダム突如決壊 死者既に八百名 空前！酸鼻の巷を現出」

二十日午前一時十分ごろから三時半ごろまでにわたり、秋田県鹿角郡尾去沢鉦山撰鉦所
の毒水沈殿池六町歩一万坪が、連日の降雨のため一大地響きと共に決壊、毒水は滔々と付近に流出し、中沢、笹小屋、瓜畑、新堀、
新山、蟹澤、西道口、春木澤各部落に流れ、
八ヶ部落五百戸が流出、村民二千八百名の大
部分は或いは米代川に押し流され、或いは埋
没し、午後一時半までに判明した死者八百
名、重傷者これまた数百名に上っているの
で、尾去沢は一瞬にして阿鼻叫喚の巷と化
し、生きながらの地獄である。損害二百万円
に上る見込みである…。

(読売新聞 同二十一日夕刊)

「罹災地に極寒襲来 天無情！零下三度

“死の泥海” は一面結氷 発掘作業行き悩む」

山谷の鉦山町が一瞬にして一面泥海と化し、死屍累々たる中に暗黒の一夜を送った

墟の尾去沢町！ 明くれば二十一日、初冬の気は無慈悲にも夜来とみに低下し、午前六時には零下三度という本年初めての最低気温を示し、泥海の表面には薄氷さえ張り、暁の惨禍襲来に着るものも取り敢えず素肌で逃げ出した罹災民は、寒気膚を裂く中にも夜明けとともに親をさがす子、子をさがす親、夫をさがす妻等が眼ざしもうつろに歩き回る姿は涙なしには見られないたましい光景である…。

(読売新聞 同二十二日夕刊)

「惨！ひしと抱き合う幼い兄妹の死体 地上の一切を呑みつくした 泥土の移動なお続く」

尾去沢鉦山の惨事は現場調査の結果、予想以上にひどく、ノアの洪水もかくやと思わせるものがある。決壊した沈殿池からは午後五時ごろから再び物凄い音と共に流れ、残った泥が下流目指して押し出すので救護隊も危険で近寄れず、降雨でもあれば残りの泥が一時にどっと流れ出すおそれがあるので、生き残った部落民は暗夜の山上に避難している。：
：尾去沢鉦山の中心銀座街である笹小屋部落についた。昨日まではお山の繁盛を誇っていた笹小屋部落は今僅かに泥まみれの四、五軒を残すのみで全滅だ。消防隊数十名がシャベルや鳶口で泥海をひっかき廻していた。鳶口にひっかかるものは死体だ。六つ七つになる兄妹がヒシとどき合って死んでいる…。

(東京朝日新聞 同二十一日)

さて、事故原因は降雨による自然災害だったのか。

「会社側の措置に重大なる手落ち 予想外の被害の甚大さに 内務省で詳細調査」

…現在判明しつつあるところにも、数日前既に今回の大惨事を起こしたダムの一部決壊箇所を発見したにもかかわらず、事実を隠蔽して全山に知らしめざる等、鉾山側の措置に遺憾の点あることも判明しつつある次第で、当局は会社の態度に対して重大なる不満を有し：（秋田魁新報 同二十一日号外）

「二時間も遅れて 部落へサイレン」

…ダムが決壊し始めたのは午前一時ごろで、逸早くこれを知った中沢部落民は直ちにダムに殺到して、応急防備の手を加えたが、遂に支え切れず、ダムは上層部から次第に加速度で決壊して来たので、部落民は「それ逃げろ」と怒号しつつ逃げ出し、この騒ぎに四時ごろにいたって漸く鉾山事務所では「山津波来！」のサイレンを鳴らして部落民に避難を促したが既に遅く、山の堤防二町余も決壊し：

…溜池の決壊に当たり鉾山側では従業員の家族にのみ逸早く避難を報じ、一般民家には通知がおくれたため被害は一般民家に多く、鉾山側の採れる処置に対して轟々たる非難の声を浴びせている。

「惨事の責任究明 続く小決壊に彌縫的小細工 検事局 鉾山長を召喚」

…同鉾津ダムは最近の豪雨でしばしば小決壊をつづけていたのに、鉾山側はこれに対し何らの対策を講ぜず、ついに二十日午前一時ごろかなりの決壊箇所を発見した片山副鉾山長は、これを全山に知らせず消防組の手によって防備作業を開始したが、この小細工では如何とも支え切れずそれより二時間半後に大決壊したもので、鉾山側の処置には重大な手落ちがあるものと見られ、その責任が追及されている。（読売新聞 同二十一日夕刊）

なお、尾去沢鉾山とは、当時の読売新聞によれば、今から千二百余年前、和銅年間に発見された本邦最古の銅居で、はじめは金山として運営。明治二十二年、三菱の経営となった、わが国五大銅山の一つ。この鉾山を中心に戸数千五十九戸、人口六千二十一人、十三部落からなる尾去沢町があり人口の七割四分が鉾山によって生活。



事故による惨状は、その規模こそ違え今度の大震災とそっくりである。大量の泥水が一気に押し寄せ八つの地区をのみ込む。有毒な硫化銅の鉾津にもがき苦しんで命を落とす住民。子どもを探し回る親、親の遺体にすがりつく子ら、死の泥海に零下三度という追い打ち…。この惨事を引き起こしたのは、実は三

菱鉾業側の手落ち、手抜きからだ。沈殿物がたまり過ぎたのに代用溜池造りが遅れていたこと、数日前からダム決壊の兆しがあつたにもかかわらず十分な対策を取らなかったこと、通報遅れから避難指示が間に合わなかったことなどが新聞各紙から読み取れる。大震災―津波の中でもがく東北の住民。放射能という「鉾毒」に逃げ惑う福島の人たち。歴史は形を変えて繰り返す。

ダム決壊の生き地獄を鶴彬はどう見ていたか。

決潰する夜のダムの真下の鉾夫村

きのうまでとかした毒泥あびせかけられ
救いをよぶ咽喉ふさがれてしまう硫化泥よ
泥海にふた親のまれた子がいる子をさらわ
れた母がいる

毒泥を呑んでつかんで悶絶の姿にされて
凍っている

掘り出された屍の一つを父ちゃんと知る星
の光

たたきつけるように怒りの句が次々と並ぶ。さらに、三菱という巨大資本の人命軽視がもたらした惨事であることを念頭に、

生き埋めのうらみ買い占めてやろうという
見舞金だった

凶作つづきの田は鉾毒の泥の海

十年はつくれぬ田にされ飢えはじめと、責任の取り方にも追及の手を緩めない。

鶴彬は戦争へと突き進む国家、大資本の前に命を賭して立ちふさがり、川柳という武器で待ったをかけてきた。しかしその武器はあまりにも小さく、流れを押しとどめることはできなかった。メディア、教育界を含めた怒涛のような戦時体制への動きに、立ちふさがった少数者は押しつぶされ、そして敗戦。

目を転じれば、いま日々危険を増していく原発事故の恐怖。「原発やめよ」という少数者の意見を無視して進められてきた政策、電力会社の姿勢に「尾去沢ダム事故―鶴彬」が二重写しとなる。少数者の声に耳を傾ける社会でなければならぬという教訓を、無言のうちには鶴彬は語っているのではあるまいか。

「もしも」は歴史には禁物といわれる。「もし本能寺の変が起ころず信長の支配が続いていたら、その後の日本は…」と考えるのは無意味だ。しかし、鶴彬の反戦、虐げられた人々への思いが、「もし」社会を動かし大きな力になっていたら…と想像することは、今後の社会のありようを考えると、決して無駄ではあるまい。

未来は現在の積み重ねなのだ。

(鶴彬を顕彰する会 角島 広治)

文献発掘

手と足をもいだ丸太にしてかへし

《鶴彬の句について》

ふじのたがわ (詩人会議会友)

小豆島で開かれる夏の詩の学校へ行くために南港へ向かうニュートラムの窓から貯木場に浮かぶ丸太の群れを見てこの句を思い出していた。「丸太」という表現は現実の傷痕兵に向けられれば「侮蔑」の言葉としてたちまち抗議されるだろう。この句がなぜ鋭い反戦句となり得たのだろうか。「丸太」という表現の比喩としては「侮蔑」としか思えないこの言葉の衝撃性による部分が大きいと思う。何故だろうか。それは風刺の矢がピタリと的を射ていて対象を指名しているからだ。そして戦争を具体的な姿でイメージして見せる。

「してかへし」に張本人糾弾の意味

「もがれて」「なつてかえる」などの受身で自動詞的表現だと特定の個人としての傷痕兵暗示するが、「もいだ」「してかへし」と能動的な他動詞表現は個別性を排して一般化するだけではなく、具体的に最高責任者である支配者の行為を明示して手と足をもいだ張本人を名指ししたと同じ効果をあげているからだ。

「丸太」が支配者の行為への糾弾としての意味をもち支配者に投げ付けられた言葉としてあるから言葉の「侮蔑性」が支配者の行為の残酷さの比喩としての意味を持つてくるのだ。「丸太」を「白骨」と入れ替えてみればそのことがよく理解できるだろう。それが「生体」であることによって残酷さがより一層イメージアップされてくるのだと言える。傷痕兵個人の比喩から支配者の残酷さの表現としての言葉の「意味」の転換が風刺の威力を倍増させているのだ。それは「キタナイ」言葉であればあるほど攻撃的な効果を発揮する仕組みになっている。

以前詩人会議誌の特集で、くにさだきみさんは、「キタナイ言葉の破壊力」について書いていたが通じるところがあるうか。このからくりが分からなかった私は、この句は鶴彬自身のことを表現したものだと思っていた。他人が傷痕兵に対して「丸太」と言えば許されないが傷痕兵個人が自虐的に使う場合には抗議の叫びとして許されるからだ。「手足をもいだダルマ」なら常套的な説明表現だが。やはりこの句の生命は「丸太」にあると思う。枝を切り払われ足根を切断された丸太のイメージを鶴彬はどこで手に入れたのだろうか。

天皇制権力への激しい怒りから

「鶴彬の生涯」岡田一杜著 (機関紙出版) のなかに「四貫島 (大阪市此花区) の友人の

下宿で仕事探しに疲れ云々」とあるのを見てニュートラムの窓から見た丸太の群れが私の脳裏にひらめいた。ひよつとしたらここが「丸太」の発想源ではなかったろうかと。前掲書の末尾で元七三二部隊の医師が「昭和十二年当時（この句が発表された）「丸太」は傷病兵に対する隠語だった」と言う証言を読んでもなおその隠語そのものの発想源ではなかったかとさえ思えるからだ。この句は天皇制権力への激しい怒りと資本主義体制への鋭い批判なしには生まれなかった表現だと思う。その事は彼の句を二、三句読めばすぐに納得のいくことだ。あまりにも有名なこの句に対していまさら私ごときが付け加えることなど何もない。あまたの人によつて論じられ、すでにいつかどこかで誰かが言ったことの蒸返しにしか過ぎないのだが、それでもなお書きたかったのはたまたま見た車窓の風景からこの句に出会えた偶然に感動したからだ。

決意の表明、豊かな暗示力発揮

もう一句挙げる。「暁をいだいて闇にいる 蕾」（鶴彬）小熊秀雄の「馬車の出発の歌」を思い浮かべた。小熊の薔薇は目覚めている権利の比喩だが暗黒の中に開いている花の色を論理の展開によって証明して見せる。鶴の句は自己の存在の証明と思想の確認とその決意の表明としてわずか一行にもかかわらず豊かに映像的である。一語がすべて豊かな暗示力を発揮しているからだ。

「いだいて」は独房にひざを抱いて黙念と座す姿を言葉の二重像として鮮やかに思い描かせてくれる。「暁」は獄窓に見た朝焼けであり、日本の未来への熱い思いの色であり、音感も赤旗に通じているだろう。「闇」は政治と社会の現実であり「蕾」は固く握りしめている決意の比喩であり、心にたたみ込まれている怒りであり「蕾」の中の「雷」はやがて爆発してとどろく雷鳴のイメージを生んでくれる。

鶴彬は比喩と寓意の名手だと思う。それが風刺の鋭さを増幅するのだ。比喩は認識の方法の一つだが同時に認識の深さと鋭さが優れた比喩と寓意を生むのだとも言える。その比喩が時代の発展の中で新しい意味を担って鮮やかに句をよみがえらせることもある。

「ロボットを殖やし全部を鹹首する」は今日の状況である。

最後にホツと息抜きの一句を。

「うたたねは弁証法を屋根に葺き」

高尚な理論をいだいての日和見と解せば笑っていられないが鶴彬の句の中ではめずらしくフツと息の抜けるおかしさがある。初期には「菩提樹の陰で釈尊糞たるる」（鶴彬）という諧謔味の溢れた句もある。詩と川柳とジャンルの違いはあっても作品の良さを構造的に読み解いておくことは詩の理解にとっても意義のあることだと思う。

（九七・八・二二記）

子供川柳に見る生活

東北川柳連盟理事長 佐藤 岳俊

平成二十三年の初春に盛岡市で「子供の心を育てる川柳教室」が開かれた。宇部功氏の指導のもとに、岩手県内の小学校の先生方が日常の川柳の指導と現状を報告しあい、相互に話合った。ここで子供についての古川柳を掲げる。

かみなりをまねて腹掛やつとさせ
手摺ひ子帰ると鍋をのぞいて見

椀の中から継母の顔を見る

これらの古川柳は大人の目から見た子供達の生活の一編である。それでは現代の子供達はどうのように日常を見ているであろうか。

その日に出された川柳を掲げてみる。

たのしいな本の世界にぼくがいる（小一）
キーパーとどこをねらうかにらめっこ（小二）

先を読みいのちを守るレスキュー隊（小三）

先生は心の声も読み取るよ（小六）

この本で科学者の道きめました（小三）

母いつも父に読ませる説明書（小六）

友からの手紙読んでる勇氣出る（小六）

音読が上手く聞こえる雪の夜（中二）

これらの川柳は課題「読む」から出されたものである。そしてこれらの川柳作品に子供達の日常の暮らしの様子が見えてくる。

川柳作品のひとつひとつに目を輝かせる子

供達の光景が見えるのである。

この作品群の中で特に注目する作品があった。

音読が上手く聞こえる雪の夜 三船恭太郎

三船恭太郎君は以前に次の作品を残した。

本当に汚れたものは目に見えぬ

汚れる世界や人間の奥へ突入したこの作品

は、鋭い子供の眼光である。

三船恭太郎君は中学二年生であるが、第60

回全国小・中学校作文コンクールで文部科学

大臣賞を受賞した。その題は「未熟な苺」で

あった。

彼はその受賞のインタビューで次のことを

語っているのだから見つけ

「…作文は日常が流れている中から見つけ

るので、普段は特別意識していない。ただ、

月一度続けている川柳のおかげで、題材を見

つける力についてはきたかなと思う…」と。

これは又新鮮な言葉である。彼の言う「題

材を見つめる力」が三船君の川柳を新鮮で生

き生きとさせていることを知るのである。

二〇一一年一月発行誌より、いくつかの子

供川柳を拾ってみたい。

川柳宮城野一月号「あすなる抄」

北風はあきのおちばをかついである (小二)

みぎひだり揺れる心の交差点 (中一)

川柳すずむし一月号

地球には戦争などはいらぬよ (小五)

川柳マガジン一月号ジュニア柳壇

歌声が音楽室をとびだした (小五)

東北の川柳誌を中心にして、子供川柳は全
国に展がっている。

日常の生活の中からテーマを発見し、持続

して作句していくことが子供川柳にとって大

切であろうと思った。(「東北川柳連盟会報」

平成23年2月15日発行、第20号より)

◆平成二十二年度こどものこころ

五・七・五年間賞

宇部 功 選

パラリンピック臨む選手の強い意思

山根小五・和田 夏乃

王様は見えぬコートでふるえてる

寺田小三・高橋 凌平

お父さんぼくらを守る大きな手

宿戸小四・大下 隼矢

ごうかいにスイカをがぶり生き返る

生出小三・号刀 浩天

すきな人いるけどママにひみつだよ

松野小二・藤田 綾

いつだって母のアンテナ私向く

城北小六・佐々木芽衣

うれしさは明日の自分のエネルギー

生出小六・竹林 聖純

都会から帰ってきたら深呼吸

山形小五・三浦 見

校庭にあふれる笑顔はじけてる

松野小六・田村 奏

母の愛わかっていくがつかれるな

寺田小三・深野 碧人
先を読みいのちを守るレスキュー隊

角浜小三・すぎえゆうすけ
もどりたい遊び一番幼稚園

城北小六・野頭 照裕
核兵器無くして平和とりもどす

月が丘小六・川村 慧
ありがとうあなたとつなぐぎずなの手

月が丘小六・玉木 穂香
友だちがふえて遊びもふえていく

寺田小三・佐々木駿介
気持ちこめ世話した花はきれいだな

角浜小五・川口みさき
あったかいことばをきくとぼくよわい

生出小一・えんどうれん
行間に心ふるえる物語

岩手大附中二・三船恭太郎
家中がしんと静まる母の風邪 同

気がつけば小さく見える父の靴 同

2児童 秀逸 愛 川柳

八幡平市から全国入選

八幡平市の寺田小3年の深野碧人君と松野

小2年の藤田綾君は、第3回「愛」をテーマ

にした川柳全国公募(山形・米沢市芸術文化

協会主催)のジュニア部門(小中学生)に入

選した。2人は全国の3834句の中から、

ともに最優秀作品の「天位」に次ぐ「地位」

の5作品に選ばれた。

深野君の句は「母の愛わかつているがつかれるな」、藤田君の句は「すきな人いるけどママにひみつだよ」。

お母さんからの「勉強やりなさい」の言葉から句を着想したという深野君は「川柳を考えるのは楽しい。もつとすごい句を作りたい」と意気込む。お母さんと話して思いをついたという藤田君は「うれしい。考えるのは難しいけれど、川柳を頑張りたい」と喜ぶ。

寺田小と松野小の児童は元寺田小校長の宇部功さんが指導する「子ども川柳」に毎月投句している。

同公募はNHK大河ドラマ「天地人」で話題となった直江兼続の愛を貫いた生きざまを振り返ろうと、2008年度にスタート。最後となる今回は一般の部も含め計2万184句の投句があった。

(2011・2・12付「岩手日報」)

鶴彬川柳を学んで

盛岡の小学生が感想文

戦争への思いがいっぱい

八幡平市立寺田小学校六年 山本 梨沙

わたしは鶴彬の授業をうけて、初めて知ったことやおどろいたことがいっぱいあっておどろきました。鶴彬さんの書いた『手と足を

もいだ丸太にしてかへし』を見て、最初何のことだろうと思っただけ、この川柳だけに、戦争への思いがいっぱいつまっていたことを知って、びっくりしました。この川柳は残こくだけ、鶴彬さんの思いがよく伝わってくる川柳だとわたしは思います。それに、石川啄木と田中正造には深いつながりがある、田中正造が岩手に来て七時雨を通ったなんておどろきました。授業をうけて、川柳にはたくさんさんの思いが入っていることがよくわかりました。わたしが歴史で勉強した「田中正造」や「石川啄木」について知ったことがいっぱいあったし、鶴彬さんについてもよく知れて良かったです。すごく伝わってきました。本当にありがとうございます。

啄木、田中正造、鶴彬と命

八幡平市立寺田小学校六年 遠藤 伊吹

私は授業を受けて、鶴彬のことを知ることができて良かったです。鶴彬さんは初めて聞いた名前でした。戦争中に反対のことを言ったりしちやだめなのに詩を書くなんてすごいと思いました。せりりゆうの一つ一つに意味があって、一冊の小説ができるくらいなんてびっくりしました。鶴彬さんは、岩手県出身の石川啄木のことを自分の師しようよりすごいと言ったなんて私は思っても言えないと思いました。それと、田中正造は七時雨を通って寺田も通ったと聞いてびっくりしました。

私が住んでいるところを田中正造が通るなんて：と思っただけ、田中正造はどんな気持ちで寺田を見てたんだろうなあと思っただけ、初めて聞きました。教えて下さったことは、初めて聞いたことがいっぱいあったけど、三人の共通することは命ということがわかって良かったです。教えてくださって本当にありがとうございました。

戦争ってどんな意味が？

八幡平市立寺田小学校六年 伊藤 彩貴

『手と足を もいだ丸太に してかへし』この川りゆうの作者、鶴彬さんから始まった授業。今回の川りゆう教室では、一体何をやるのだろうかどきどきしていました。鶴彬さんの句は、戦争を題材とするものばかりでした。その句たちからは、戦争時代の苦しさ、悲しさが多くうかがえました。やはり社会の授業で習ったように、戦争はやって何の意味があったのかと改めて思いました。

鶴彬からつながり、一番の理解者であった「石川啄木」さん。川りゆうの恩師よりもすばらしいと鶴彬さんが絶賛した人とは、どのくらいの実力者なのかと思いました。また、石川啄木からつながった田中正造さんに至っては、この寺田の地を通ったというので、すばらしい縁だなあと思いました。

今回授業を受けて、たくさんさんの新発見がありました。本当にありがとうございました。

獄中の鶴彬 (二)

青木 英夫

昭和十二年七月七日、遂に日本軍国主義は中国に本格的な侵略を開始した。

新しい世界戦争への嵐をはらんで、この年は波乱に明け暮れた。前年十二月、中国ではいわゆる「西安事件」が起り、日本の侵略主義に、民族の利益を無視して緩和政策をとっていた蒋介石が、止むなく共産党の弾圧停止、抗日一致団結を誓うに至った。翌一月九日、西安で毛沢東、周恩来指導の下に抗日デモが行われた。四月三日、ロマン・ロラン等によって、パリで戦争反対平和擁護のための国際大会が歴史的に開かれ、五月一日、コミンテルン執行委員会でデIMITロフは、当時の世界的なファシズムの勃興に対して「反ファシズム統一戦線」の方針を発表した。

総選挙で無産派躍進、争議激発

日本国内では、三月三十一日、軍の圧力により突如衆議院が解散され、翌四月三十日、第二十回総選挙が行われ、社会大衆党三十七議席、日本無産党一議席と、無産派の当選は、明治以来、戦前の最高に達した。この年は又、町工場から、軍需工場に至るまで争議が激発し、参加人員は戦前の最高を記した。国内の先鋭化した矛盾を、侵略戦争に転化するのにはファシズムの常道である。五月四日、

第一次近衛内閣が成立したが、軍部の侵略欲は、翌月中日戦争をひき起こした。しかし一日おいて七月九日には、東京、大阪、北海道に「兵士家族の救済」「兵士の賃金全額支払」等の反戦ビラが頒布され、一方、中国共産党は二十三日に「抗戦宣言」を、次いで八月十五日に「抗日救国十大綱領」を発表、全民族が祖国防衛のためにあくまで抗戦すべきことを訴えた。九月四日には、世界各国の労働組合が対日ボイコットを決議、二十二日には抗日よりも滅共に血道をあげていた国民政府が、国民の要求に押されて、懸案の国共合作を発表、日帝の恥ずべき侵略戦争は内外の抵抗をうけるに至った。

鶴彬が、どのように中日戦争を迎えたか、まだ明らかになっていない。いや、彼の川柳以外の重要な一面である生涯の政治活動については殆ど未知のままである。私は、彼が組織に属して活動していたに違いないと推定を深めているのだが、その実体は全く判っていない。彼が中日戦争前後のあわただしい危機に拱手して過ごしたとは、とうてい考えられない。現在大筋が明らかになっているのは、翌八月以降、死に至る十三ヶ月の間である。

中国侵略の出征「なにがめでたい」

八月に入って、早くも鶴彬は招集された。彼は思わず舌打ちをした。忌まわしい侵略戦争に協力しなければならなかったからである。もう一つ、ようやく販売ルートも出来て元手をかえしはじめた数十羽のウズラを処分

しなければならなくなった。それにもかかわらず彼は応召に勇躍した。彼は活版で各方面に挨拶状を送り、「日本国民のため献身します」と読みようによつては意味のある抱負を述べた。恐らく八月十日頃、彼は出征兵士に湧き立つ上野駅で歓呼の声に送られた。しかし、あまり万才万才と騒がれ、うわべのおめでたを述べられたので――あの上野駅の大天井の興奮の中で、ボス的な郷軍人会長あたりが愚劣な忠君愛国演説でも聴かせたのだろう光景を想像する――彼はついつい本性を表して、「中国に攻め込んで、両国の人民大衆が今後悲惨な目にあうに極まっているのに、なにがめでたいんだ」とムキになって言ってしまった。無垢で一徹な彼にはこの国を挙げての狂気が堪えられなかったに違いない。これが折から雑踏にまぎれて張込中の特高の眼をそばだたせた。こうして彼は信越廻りで郷里の土を踏んだ。

非転向を警戒、入隊即帰郷命令

しかし、十三日に再び金沢師団に入隊した彼は即日帰郷を命ぜられた。その理由については現在様々に言われている。近親者の言によると、彼は胃を悪くしていたからだと言われ、又、入隊の前日、郷里での送別会でつい羽目をはずして飲み過ぎ、身体検査で問題にされなかったからだとも言われている。だが彼ほど聡明な男が、又、次に述べるように軍隊潜入の意志があったと思われる彼が、そんな不覚をとったのだろうか。或は、彼らしい

茶目氣と、単純な氣の好きが災いして、郷里の朋友と氣勢の上るまま、千慮の一失ともいふべき「飲みすぎ」をやらかしたのかも知れないが、しかし考えてみれば、そんなことは入隊者にはありがちなことで、そんな一時的支障で、对中国部隊増強に狂奔している軍が彼をほうり出したのだろうか。況して、彼は、具て軍隊生活の体験があり、人目をひく壯軀の持主だったのだから。(この前後は彼は元氣に活動している)。

もし、そういうことがあつたとしても、軍が彼の思想問題に眼もくれずに、事を運んだとは思えない(已に上野駅で、特高の眼の光るところとなつた)。軍が事務的にウカツにも彼を招集し、営門をくぐつてきた彼を見るなり、且つ七連隊を震がさせた当人であることを発見し、軍機上あわてて手を打つたことも充分に考えられる。「転向」の季節が過ぎ、殆どの旧プロレタリア文化運動者が転向しおおせ、一部は積極的なファシスト化しつつあつたこの時期に至つてさえ、彼は一人ごうも転向する氣配さえなかつたのだから当局にとって、第一級に警戒すべき対象であつたことは間違いない。

入隊の意気込みは「偽装」だった

ともかく、彼はすっかりしよげかえつて東京にもどつてきた。その様は相当な落胆ぶりだつたと、井上信子氏は回想している。彼が忠君愛國の念に燃え、光榮ある「聖戦」シコの御楯たれぬ男兒の不甲斐なさに涙したと考

えることは絶対にできない。彼の信念は全くその逆である。そのことは、弾圧の原因となつた反戦川柳に明らかである。その彼が意氣込んで、出征の挨拶状を配布して、入隊した事実は、ある目的のための「偽装」としか考えられない。これより前の時期に「赤旗」(戦後復刊・三一書房版)には、軍隊内部からの通信が散見され、満州事變の前年、昭和五年一月には、非合法の日本共産党内に軍事部がおかれ、後に反軍指導の定期刊行物(「高いマスト」「兵士の友」)を頒布していた。軍隊および、軍艦に党細胞が生れ、反軍活動をしこの種の事件さえ起つた。此頃、ファシズムの狂暴な攻勢の中で、デイミトロフは、共産黨員がナチスに加盟してたかうことは恥ずべきことではなく、必要でさえあると述べている。

大陸の戦野で反軍活動したかも

或は、更にウガツて見れば、彼の「落胆」は見せかけかもしれない。しかしいづれにしても、彼の期するところが、反戦・反ファシズムにあつたことは確かである。もし、この時、彼がなにごともなく、軍隊に入つていれば、彼は大陸の戦野で今度こそ経験をつんで巧妙に反軍活動をやり、何らかの集団行動を組織したかも知れない(中日戦争を通して前線での逃亡事件、叛乱事件は少なくない)。更に八路軍に投じ、延安で野坂参三の指導する「日本人民解放連盟」で反戦・解放のためにひたむきに活躍し、生命を得て戦後帰国し

たならば、この日本の社会と柳壇の民主化のために、余程の貢献をしたのではなからうか。殊に、人材に乏しく、民主勢力の微弱な川柳界に波紋を投じたに違いない。この伝記を書いている私の思いは果てしない。

ともかく、彼の真の意図は那邊にあれ、これによって、軍隊に入ろうとする彼の意図は挫折した。もはやウズラの飼育業をやり直すこともできなかった。ところが折よく、知人の秋山清氏が、東京深川の木場にあつた木材通信という業界新聞に職をあっせんしてくれた。秋山清氏は、旧いアナキストで詩人であり、局情という筆名で「川柳人」に評論を寄稿したこともあり、中島国夫氏(現「川柳人」主幹)とも交わりがあつた。木材通信にはその頃、久保田木之助という剣花坊の門下があり、彼を引入れるに好都合だつたと秋山氏は回想している。

左翼系がそろつていた木材通信

この新聞社は全く面白いところで、社長が且て幸徳秋水とアメリカで知り合つた旧いアナキスト、副社長は三・一五に引掛つた人、当時の編輯長は副社長の知り合いのコミュニケーション、他に戦時中の反戦運動(立川事件?)で獄死した屋部氏、戦後アカハタの復刊に努力した山辺氏などがいた。評論家の岩上順一氏も鶴彬と同時代につとめていたともいわれる。ずっと後になって、評論家の花田清輝、詩人の岡本潤両氏が村山氏の世話で入社した。つまり、なんとなくそうそうたる左翼系

が集っていたのである。

同じ職場で記者をしていた長谷川英夫氏は、当時の鶴彬を回想して次のように述べている。

長躯そう身で浅黒い彼は、その言動にきわめて率直な何者も恐れぬ鋭さを示し、私の社に沢山いた偽装転向組からは大分敬遠されていたようだ。しかしその反面どこことなくユーモラスな気風をただよわせていたのが彼の特徴だった。(「しやもの国」と闘った詩人・アカハタ昭和二十五年一月二十四日付)

転向組をへきえきさせ、敬遠？

彼がどのような「率直」な言動で「敬遠」されたのかは明らかではない。あまりに真っ正直すぎて、転向者のうしろめたさに触れ、自分だけよい子のようにうけとられたのか、或は正義感のおもむくところ、官憲の忌諱にふれるようなことを遠慮なく吐いて、内心おだやかでない転向組をへきえきさせたか、恐らくそんなところだろう。後で述べる平林たい子氏の回想によると、彼は人づきあいは悪くなく、快活で人をひきつけるところさえあったが、あまりに真っ正直なので、こだわりのある人とは争が起ったという。

さて、彼がここでどういう仕事をしていたか判っていない。ただ和服好みの彼が、仕事の都合上、珍しく洋服に踏み切ったことである。話は彼の逮捕に移る。

日本国内は急速に戦時体制に移った。八月

十五日には、閣議で対華軍事侵略が決定され、九月十日には戦時統制三法が公布され、十月二十五日には企画院が設置され、十一月六日にはファシスト国家の世界分割の同盟の第一歩となった日独伊防共協定が調印され、二十日には大本営が設置された。時を同じくして、労働組合の反動化が露骨になった。十月に全日本労働総同盟は歴史的な「事変中スト絶滅宣言」を発し、この前後、組合の戦争協力方針の決定が相次いだ。十一月十五日社会大衆党全国大会は「国民意識高揚」の新綱領を撰択し、社会ファシストへの一歩を進めた。十二月一日東大矢内原忠雄教授(現東大総長)は筆禍で辞職、十三日には日本軍は南京占領、「南京大虐殺事件」が中国の民衆の上に襲った。

知識人、運動家ら四百人逮捕

十五日には最後の大規模な弾圧事件である「人民戦線事件」が起った。已に共産主義者は殆ど根こそぎにやられていたが、そうなる弾圧機関の眼は、残された社会民主主義者や自由主義者の上に向けられた。皿まで食うファシズムの悪魔の手は、共産主義者に一線を画しても、これらの人達の安全を認めなかった。約四〇〇人の教授・知識人・社会活動家が逮捕された。二十二日「日本労働組合全国評議会」「日本無産党」(書記長鈴木茂三郎)が解散を命じられた。二十九日全国農民組合は戦争協力体制に転換した。この年共産主義運動関係の検挙は一、二八六人に達

し、内二〇七名が起訴され、文芸同人雑誌の検挙は十二件にのぼった。この年は又、一時安定した世界恐慌が再発し、帝国主義諸国は活路を求めて戦争の方向に向いつつあった。正にアジア大陸の一角に戦火がたきつけられた(この部分は国民庫版「社会運動史年表」に負うところが大きい)。

本誌一月号に記したように、鶴彬が検挙された月日は今以って判っていない。彼の近親者、井上信子氏、長谷川英夫氏は十一月末ではないかと言っている。しかし、最近、河出書房刊「現代俳句事典」巻末の年表に「十二月」とあり短詩形文学に対する「最初の弾圧事件」とあるのを、俳句史研究会楠本憲吉に知らされた。これは新事実である。ところが本稿のため数日前にお会いした平林たい子氏の記憶によると、鶴彬は平林さんが前記「人民戦線事変」に連座した一週間ないし十日前に検挙されたと聞いた覚えがあるという。これから逆算すると、彼が捕らえられたのは十二月五日前後ということになる。現在明らかかなことは、彼が朝捉えられたということである。

浅草ではぐれ：最後の別れに

実弟喜多一二三氏は次のように回想している。「兄貴とはよく一緒に飲みました。兄貴は『せいぜい俺に投資しておけ、今に倍にして飲まず。有望だぞ』といいましてネ。兄貴は生活が楽でなかったもので、私がおごりました。：あれはおトリ様の日(毎年十一月の西

の日(十二支による)に東京浅草の大鳥神社が商売繁盛を期して酉の市を開く。一の酉、二の酉があり、年によって三の酉まである)に二人で飲んで、それから浅草の観音様の裏に出て、連れ立って歩いている中に夜の雑踏にまぎれて、はぐれてしまったのです。それが兄貴と娑婆で別れた最後になりました。それからたしか数日後に検挙されたようです。

長谷川英夫氏は次のように記している。日は忘れたが、ある寒い夜、淀橋戸塚四丁目の私の自宅で、彼と二人で酒を飲んだ。彼は、相当いきげんになり、元氣よく夜更けの道を帰って行った——。検挙されたのはその翌朝、ややおくれて出社した時は、すでに彼は社から警視庁特高に引っぱられてしまった後で、なぜか彼の帽子だけが机上にボツンと残されていた光景が、今も私の頭に生々しく印象づけられている。(前掲「アカハタ」紙)

附記 前号であげた七連隊事件の発端となったと思われる「労働新聞」について。この名前の新聞は日本の社会運動史上何度も出されているが、ここで問題の新聞は、「会評」・「昭和三年結成」の機関紙「労働新聞」だと思われる。

一九五六・九・十四鶴忌に(人民川柳会員「和」十号)昭和三十一年十月発行より転載)

〔青木英夫のプロフィール〕拓殖大学卒。俳人、川柳人で「和」同人だった。

投稿

「暴風と海との恋をみましたか」考

和川柳社同人 岩原 茂明
(金沢市在住)

今日では冬の高松海岸は能登有料道路の高松パーキングで手軽にたつことができる。論者も過去幾度となくその景色に遭遇した。実のところ、暴風が吹き荒れているときは海を眺める余裕などはない。あるのはパーキングに停めたクルマに乗り込んでから後のことである。高松海岸付近は砂丘が続き、しかも北の千里浜海岸同様、非常に細かい粒子の飛砂は目をも潰す勢いだ。

喜多少年の時代にはクルマなぞあったはずもないから、これは当時の高松の在所から海を窺って一瞬かいま見た光景を後に反芻して作品化したものであろう。この句は冬の日本海を覆う嵐と荒れ狂う波が渦巻く浜辺の様を喜多少年は驚愕を持って歌ったのに違いない。その景色がよく描かれている。

つまり、この句の生命は、このような情景を的確に表したところの絵画性にある、と私は思う。この点が高松句碑の「枯芝よ団結をして春を待つ」や卯辰山の「暁を闇に抱いてる蕾」などにも共通している。

鶴の句を見るときはこの絵画性というのはもっと注目されてもいいのではないかと。いうのも川柳は俳句と同じく、連歌の発句に起源があり、五七五の拍をもつが、その流れにあって、人間社会のできごとを描くのが川柳であり、花鳥風月を描くのが俳句ともいわれている。古川柳の時代は俳句と別れて日も浅く、絵画性に富んだ句もあった。

そういう視点から改めて鶴の句をみたら「手と足をもいだ丸太にしてかへし」や「おんどりみんな骨壺となり無精卵ばかり生むめんどり」に至るまで、絵画性が連綿と続いていることに気づく。それだけ古川柳に近いようにも見える。

なおこの句の人間社会の視点はどうかであろうか。「暴風と海との恋……」の「恋」は人間社会の賜物だが、短歌ならいざ知らず、川柳には余り登場しないように思える。暴風と海とが恋をした状況では人間社会がいかに小さいものとなるのか、自然の脅威を前にした人間社会の争いがうら若き喜多少年にいかに小さく見えたのか、そこをあざわらったということだろう。この点は成熟するに従い、当然社会に対する視点が高まっていったものだろう。ただ「恋」という男女の関係についての視点は、その後の多くの作品に女性を描いていることに繋がる端緒といえる。「修身になり孝行で淫売婦」などの女性に対する思いやを描いた幾多の作品の先駆けという評価ができるのではないか。

連載

新興川柳の軌跡

松原 秀河

〔「ばんば」昭和五十九年八月号より転載〕

(五)

二人の少年川柳家

— 福村無一路(一九)と鶴彬(一七) —

担任の先生が愛用していた「廣辞林」を貰った鶴は、これを頼りにして工場の隣にある古本屋から借りてきた難しい部厚い本を何十冊も読破していった。

この古本屋は、駐在所の野崎巡査が退職してから開いたのだが、主人の職業柄なのか思想、哲学、宗教に関するものが多かった。

鶴は暇さえあれば野崎さんの店に入り浸りで勉強していたので、終いにはもうこの店に読むものがないという程の読み尽くしぶりだった。

左隣の印刷屋の主人は、岡田澄水(本名・岡田太一)という川柳家だった。岡田さんはいつも、蚊をつぶした新聞紙のような校正刷りが、いっぱい散乱している印刷所特有の鉛や紙のインクの湿った臭いの漂っている薄暗い仕事場で深刻な顔つきをして川柳を書いていた。

鶴は此処で将来、死につながる宿命的な川

柳に出逢ったのだが後年、彼は当時の感想を「影像」へ書いている。

「僕は幸か不幸か川柳生活の上で(先生)と呼ぶべき人を持っていない。強いてそれを求めるなら僕が、まだ地方新聞の子供欄へ短歌や俳句を投稿していた小学生の頃『俳句と同じ十七文字で、川柳という面白いものがある』と知らせてくれた、岡田澄水という隣家の川柳家がそれであろう。しかしそれは、ただ川柳というものを知らせてくれただけで、川柳を教えてくれたのではない。だから僕はその後、川柳を作るためには殆んど学ぶべき人を持たずに、我武者羅にやってきたのだ。広島古屋夢村という人が主宰していた「影像」へ投稿したのは、もうこの我武者羅な道を随分と歩いてきてからのことである」

鶴が初めて川柳を公表したのは十五歳の時に石川県の北国新聞(大正13年10月29日付夕刊)に喜多一児のペンネームで掲載された左記の五句である。

秋日和 弄んでる純な瞳

思い切り笑いたくなった我

無駄な祈りと思いつつ祈る心

運命を怨んでみるも浅猿しき

そのままに流れんことを願うのみ

印刷屋の主人から川柳を見せて貰っていた頃の鶴は如何にも少年らしい単純な句を作っ

ていたのだが或る夜、彼が何気なく擦った一本のマッチの燃焼を見て

マッチの棒の燃焼に似たる生命

の一句を得て「これが本当の川柳ではないだろうか」と考えるようになった。

丁度この頃「北国柳壇」の投句の中に、福村無一路という人の一風変わった作品を見て脳天に鉄槌を食らったように驚いた。

福村無一路・作品

真昼の空間にそびゆる煙突

爆弾を抱いてよちよち歩む

ばらまいたバラの一つよみがえり

秋さびた手品師のカギ一つ

からくりを捨ててて双手をさしのばす

当時まだ北海道の「氷原」主宰者・田中五呂八や金沢の「新生」主宰者・森田一二の存在を知らなかった鶴は「福村君と私が川柳革新運動の先駆者だろう」と思いついた自負心を抱いていたが或る時、福村からの手紙で「氷原」と「影像」を読んでみるといいと知らされた。

鶴は送られてきた二つの柳誌を見て、自分の川柳に対する知識の余りにも狭小なのに再び愕然としてしまった。

川柳革新運動は自分の知らない所で誕生していたのだ——「氷原」や「影像」に載っている素晴らしい作品は自分にとって只々、不可解、驚異的であったと、ある一時期はこ

の福村無一路から大きな影響を受けていた事実を率直に認めている。

鶴は、どうしても一度、福村に逢わねばならぬと決意して手紙を出した。

× × ×

金沢の繁華街から少し外れた裏通りの安っぽいカフェーの隅で二人の少年が貧弱なテールを前に向き合っている。

色白の細面の、長身らしい身体に着古した紺緋の和服、銀ぶちらしい眼鏡の奥から澄んだ瞳で相手を、じっと見守っている鶴彬。その前の少年は背の低いガツシリした体格、やや角張った顔に、これはまた野暮ったい大きな赤銅ぶちの眼鏡、色白というよりも蒼白い神経質そうな寡黙な福村無一路。

初対面の鶴はこの時十七歳、福村は二歳年上の十九歳、川柳革新運動に若い情熱をたぎらせている二人は、これから、どんな話をしようとしているのだろうか。

▼参考資料―新興川柳選集・評伝、鶴彬・その他―

(六) (同九月号より転載)

赤銅ぶち眼鏡の男

川柳革新運動を知る前の鶴は「北国新聞」へ少年らしい、全く他愛のない短歌や川柳を投句していた程度で、まだ専門柳誌へは名を出していないかった。それが「氷原」や「影

像」の作品を見せられてから川柳の奥深い事をおしえられ（自分の今日まで作っていたのは本場の川柳ではなかったのだ）と思うようになった。

（あの人こそ真の革命川柳家だ）と畏敬していた福村無一路に金沢の一隅で、初めて会ったのは大正十四年の六月も終わりに近い頃である。野暮ったい大きな赤銅ぶちの眼鏡の奥の時々狂的にも炎ゆる、そして或る時は涙をひそめたような、不思議な目を持った彼の全体的な印象派石の如く冷たい、少年から大人へ脱皮しようとする十九歳の男。鶴の心にはそう映った。

× × ×

「ほう、君が喜多一兎君か」

ポツリ言うときと真正面から見据えられて鶴は、何とも形容し難い圧迫感を覚え、

「ええ」

と答えたきり黙っていた。

「君はまだ何も知らんだろうが――」

男は洋服のポケットから（朝日）を取り出すと慣れた手つきでマッチを擦り、いかにもうまそうに薄紫の煙を吐いた。

「君もどうだ」

箱の底を指で弾いて一本抜いてすすめた。

「僕はまだ未成年ですから」

「なるほど未成年か、だがそんな事を言っていると、いつまで経っても本場の川柳は書けんぞ。まあいいや無理には言わん」

男は灰皿へ煙草を押し潰すと話を続けた。

「君は知らんだろうが、実は本場の革新川柳家というものは全国でも数えるほどしかないのだ。彼等は、いや君が革新川柳家だと信じている連中の殆んどは、詩の切れっ端をもてあそんでいるに過ぎない贗者なのだ」

そう言うとき男は、もう泡の消えてしまったビールを一息に飲みほした。

「では、あんたも投句している（氷原）の田中五呂八はどうなんですか？」

「うん、五呂八か、彼は確かに新しい感覚で物を書く人物で従来の川柳家とは雲泥の差があり僕の尊敬している中の一人だ。だが彼は神秘主義、芸術派で（生活から生れた川柳を書く）僕の思想とはかなり隔たりがある。つまり我々のいう純粹の革新川柳には遠い存在の人だ」

（氷原）を読んで感動して、この男に会いに来た鶴は（田中五呂八こそ革新川柳の指導者だ）と言ってくれるものと思っただけに混乱せざるを得なかった。

「ではいったい、誰があなたのいう純粹の革新川柳家なのですか？」

少し興奮気味の鶴は語気も鋭く反問した。

「宮島竜二」

斬り返すように一言、そして鶴の顔を男はじつと見つめた。

「????」

また自分の知らない川柳家の名を聞かされ

た。深い川柳の底は何処まで掘り進んだら見ることが出来るのだろうか。入口を覗いたばかりの鶴は目の前が真つ暗になり気が遠くなってしまう。

「ところで喜多君」

鶴の動揺を楽しそうに眺めていた男は口を開いた。

「僕はこの宮島氏と革新川柳を全国へ浸透させるために新しい柳誌を出すつもりだ。今日君と会う気持ちになったのもこの事を話すためだった。どうだ君も同人として参加し全国に活躍してみないか」

「いや、僕のような駆け出しがそんな大きな仕事に参加する資格なんかありませんよ」

「まあまあ、そう自分を卑下するものではない。駆け出しだから誘うんだ。古い奴らは既成観念で頭がコチコチに固まっていて説得しても無駄なんだ。君のようにまだ何も知らない、やわらかい頭の方がいいんだ。資格なんでものは自分が作ってから他人に認めさせるものなんだ」

あの石のように冷たい男の目が炎えてきて顔を紅潮させたかと思える間に、いきなりテーブルを力いっぱい叩いた。ビールが倒れコップが飛び散った。窓ぎわの椅子に、雑誌を見た編物をしていた二人の女給が駆けつけた。たった一本のビールしか注文しないケチな客が喧嘩ではじめたのかと思つたらしい。

「お客さん、少し静かにして下さい」

「いや、すまん、つい話に熱中して驚かせてしまった。すまん、すまん」

男はまるで大人のような口ぶりで謝つたが鶴は恥ずかしそうに顔をあからめて、うつむいてしまった。

「出ようか」

彼は大きなガマ口から皺くちやの札を一枚つまみ出すと

「ツリはいらん」

とテーブルの上に置いた。意外な大きい額のチップに女給は礼をいうのも忘れて茫然と客の顔を見つめていた。男は鶴の肩を押して外へ出た。二人は黙って夕ぐれの古い町並を歩いていく。どこかで夕餉の仕度でもしているのか初夏の風に乗って食器の触れ合う音や、魚を焼く、かぐわしい香りが流れてくる。いまは他家へ再婚して、その消息さえ知れない母の、台所で働いていたなつかしい姿。幼い頃を思い出した鶴少年は何だか哀しくなってしまう。

「では、また——」

鶴の別れの挨拶を聞くと

「あゝ、では君さっきの話だが、一度、宮島さんと会ってみないか」

しかし余り気乗りのしない鶴は

「少し考えさせてくれませんか」

と消極的な返事しかできなかった。

「それもそうだ。僕はね、いまの川柳のことを考えると、これでいいのだろうか？と沈ん

でしまふんだ。そして苦しく淋しくなる。そのため若い生命がけずり取られてゆくような気持ちになるんだ。生命がなくなる前にどうしても川柳の革新運動に手をつけたいんだ。この苦しみを君に知って貰いたい。そして助けて貰いたいのだ。よく考えて返事してほしいと思う。その気になったら僕へ連絡をくれ給え。待っているよ」

彼は一気にしゃべってしまったと

「じゃあー」

と片手をあげて、くると背を向けると表通りの人込みの流れへ消えてしまった。

〔筆者より〕二人の会話の内容について各方面へ照会したが全く不明。止むを得ず「鶴彬全集」の〈福村無一路を惜しむ一文・喜多一二〉の文中及びその行間より私なりに解釈の上、創作したのでそのつもりで読んでいただきたい。

◇投稿歓迎

【次号締め切り7月末日】

● 鶴彬への思い

● 作品鑑賞

● 鶴彬やその仲間たちのエピソードや情報

● 「あの時代」について思うこと

● はばたき1〜4号の感想・批評

● その他鶴彬に関するもの

鶴彬川柳大賞歴代入賞作品 (二)

◆第五回 (平成十二年)

【鶴彬大賞】	借金はみんなに分ける民主主義	東京都保谷市	中西	輝
【優秀賞】	偏差値の果てに孤独のカップメン	東京都中野区	上野	脩
【優秀賞】	これ以上ボケてはまずい平和ボケ	岡山県吉井町	延原	令岱
【佳 作】	体温を持たぬペットが売れている	愛知県春日井市	田中	絢子
【佳 作】	赤紙で守れなかった神の国	兵庫県尼崎市	西川	弧堂
【佳 作】	生きている腹立てながら泣きながら	大阪府堺市	梶本	哲平
【佳 作】	出没の熊に邪心があるやるか	石川県高松町	竹中	つる子
◆第六回 (平成十三年)				
【鶴彬大賞】	九条に揺さぶりかける平和惚け	東京都江東区	谷内	肇
【優秀賞】	クーラーを買って挫折する正義感	愛知県岡崎市	高橋	伸枝
【優秀賞】	便利さへ人も文化も病みつづけ	北海道北広島市	池永	龍生
【佳 作】	鯉のぼりいくさをしない国がすぎ	兵庫県尼崎市	西川	弧堂
【佳 作】	人間を追い詰めて行く温暖化	長野県小諸市	小林	游峰

◆第七回 (平成十四年)

【佳 作】	ロケットで夢と「ミ」を打ち上げる	福岡県福岡市	三吉	誠
【佳 作】	八月の蝉よ戦後は幸せか	茨城県つくば市	野口	満寿江
◆第七回 (平成十四年)				
【鶴彬大賞】	職安に待たせたままの首がある	東京都足立区	原野	正行
【優秀賞】	寝たきりも番付にある長寿国	石川県辰口町	紺矢	はじめ
【優秀賞】	貌のない街へとつづく改札機	神奈川県横浜市	原田	順子
【佳 作】	人格を十一桁に無視される	茨城県つくば市	野口	満寿江
【佳 作】	そのうちに人間に貼るバーコード	大阪府箕面市	出口	セツ子
【佳 作】	吉本の笑いに何も残らない	兵庫県西宮市	舟辺	隆雄
◆第八回 (平成十五年)				
【鶴彬大賞】	毎日が日曜という刑もある	兵庫県西宮市	舟辺	隆雄
【優秀賞】	鶴折った指で引き金などひかぬ	大分県杵築市	浦上	純義
【優秀賞】	ときどきは秘密を洩らす非常口	福島県本宮町	浦井	隆
【佳 作】	喉元を過ぎて九条いびり出し	山口県秋市	進藤	芳枝
【佳 作】	気がつけば何時の間にやらイラクまで	福岡県小浜市	鹿野	経夫
【佳 作】	リーダーが戦争好きという不幸	岡山県吉井町	延原	令岱

■発行
■事務局
■TEL・FAX

鶴彬を顕彰する会

〒929・1215 石川県かほく市高松 キ5 (小山 広助 気付)

076-281-1201

E-mail : turuakira@yahoo.co.jp